

複合形容詞の研究

—対義形容詞の状況から—

漆 谷 広 樹

1 はじめに

本稿では「広い」－「狭い」のような対義形容詞が複合形容詞の後接要素を構成する場合に、どのような語が見られるのかについてまず実態の調査を行う。方法としては、『日本国語大辞典』（小学館）の見出しにある語を抽出する。そこで抽出した語について、現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下日本語コーパス）等を利用し用例を検索していく。

この調査の結果、対義である形容詞それぞれに等しい種類の複合形が見られるのではなく、一方に偏って出現している状況を観察することができる。まずはこの調査結果について概観し、それがどのような事を意味するのか、複合形容詞はどのように造語され現代に至るのか、先行要素と後接形容詞との意味の関連から考えていく（注1）。

2 対義が見られる複合形容詞の出現状況

ここでは、複合形容詞の後接要素が対義関係にある場合に、どのような語が存しているのかについて具体的にみていく（注2）。本稿で扱う対義形容詞は「長い」－「短い」、「広い」－「狭い」、「高い」－「低い」、「多い」－「少ない」、「太い」－「細い」、「厚い」「濃い」－「薄い」、「強い」－「弱い」、「深い」－「浅い」とする。

以下先行要素を次の二種に分け、語例を挙げていく。

- ① 先行要素が名詞の場合 (例) 味わい深い 気長い
- ② 先行要素が形容詞または副詞の場合 (例) 馬鹿長い 細長い

この章では、調査結果からどのような事象が指摘できるのか、それぞれ対義関係の形容詞にどのような語が見られ、どのような用例が存しているのかについて見ていく。またそれが日本語コーパス上には、どの程度の延べ語数が見られるのかについても調査していく。

① 「長い」11例 - 「短い」5例

「長い」

名詞+形容詞…面長い 気長い 心長い* 舌長い*

形容詞、副詞+形容詞…馬鹿長い ひよろ長い 下手長い 細長い 横長い によろ長い* 悪長い*

「短い」

名詞+形容詞 気短い 手短い 日短い*

形容詞、副詞+名詞 太短い ずずら短い*

まずそれぞれの造語力はどのような状況か見ていく。「～長い」に比べ、「～短い」方の造語力が弱いことがわかる。今回の調査では、程度が「高、強、大」等の意味を持つ語の方が、その対義である「低、弱、小」等の意味を持つ語よりも造語力が強いことが一般的傾向として見られる。

次に、「～長い」は、「～短い」の出現状況と比して、延べ語数の場合ではどのような状況であるかについて見る。日本語コーパスを用いて、先行要素が同一の場合で「気長い」-「気短い」を例に見る。ただこの語の場合では、日本語コーパスで出現するのはほとんどが形容動詞形で、「気長に」197件、「気短に」14件になる。ここは形容動詞の形ではあるが、やはり延べ語数においても「～長い」の方が多く見られることがわかり、

「高、強、大」>「低、弱、小」という状況であると言える。なお、「気長い」の形容詞形の用例を見ると、日本語コーパス以外に次のような例がある。

「気長い」

1) 以上を常に忘れず心に止め、固く守って気長く根気強く努力したならば、素質のいい者は、きっとすぐれた芸術家になれる。(倉田百三『芸術上の心得』) 青空文庫

「気短い」

2) いたるところで一見まことに単純に自然な花々を開かせているという気持ち良い人間的美観は、私たちの気短い期待でいきなり明日に求めでも無理で(宮本百合子『異性間の友情』) 青空文庫

これらの語は、現在では形容動詞による表現が多く行われている場合であるが、かつては形容詞による表現も行われていたことがわかる。形容詞と形容動詞とで語形が交替する現象は、現在でも地域的な差異としても見られるものである(注3)。

以下、いくつか注目すべき場合について見ていく。

まず「面長い」の場合について見る。先行要素が名詞の場合は、「面長い」は「面」が「長い」のように、ガ格が表示されない場合である。この場合については「顔が長い様子」として意味の予測ができる。

しかし他の「心長い*」や「舌長い*」の場合は、瞬時には語の意味を予測することが難しいのではないだろうか。これらにガ格を補い、「心が長い」「舌が長い」としても、どのような状況が表現されるのか判然とした意味は捉えにくい。実際に用例を見ていく。

「舌長い」

3) 「ヤア、黙れ、二才め。身共を佞人讒者とは、舌長き今の一言」(歌舞伎『絵本合法衛』)

これは「ことばが過ぎる。広言である。言い方が生意気である」（『日本国語大辞典』）という意味である。「舌」の意味は「話す内容や話し方」という意味に拡張している。「～長い」は「言葉数が多い」からさらにその結果加わる価値判断として「生意気だ」という意味に拡張していることがわかる。複合語の構成要素に意味の伸縮が起きていることがわかる。

なおこの語については、非複合形「舌が（の）長い」についても『日本国語大辞典』に登録されている。

4) 「尻の長いのと、手の長いのと、舌の長いのが、〈略〉一番厄介物だ」（尾崎紅葉『二人女房』）

ここでは「言葉が多い」という意味であろうか。現代ではあまり用いられない語である。構成要素に意味の伸縮が起きると、その意味が広く定着しない限り、あまり長期間は使用されない語になるものと考えられる。

次に、修飾関係の場合について見ていく。「ひよろ長い」「細長い」「による長い」のように、先行要素が後接形容詞と近似した意味である。その場合、並列の意味になる場合も、後接形容詞は先行要素を補足・説明する場合もある（注4）。

次の「ひよろ長い」は「ひよろひよろとして長い」と先行要素と後接形容詞は並立の関係の場合である。

「ひよろ長い」

5) 「枝と枝とが重なりあって、ひよろ長くなったり枯れたりするかもしれない」（小島信夫『抱擁家族』）青空文庫

『日本国語大辞典』の意味記述を見ると、「ひよろひよろと長い。細く弱弱しく長い」とある。「ひよろ長い」の用例は、近世の洒落本に用例が見られる。この語は現代でも使用が見られる。これは、先行要素と同

根の「ひよろり」や「ひよろひよろ」が現代語でも使用され、意味が連想しやすいためであると考えられる。

「～長い」には見られず、「～短い」には見られる語として、「太短い」がある。

「太短い」

6) 「さうして、太短い首の上ののった北斎描く孫悟空のやうな特徴のある頭を心もちうしろへ外らせながら」(織田作之助『聴雨』) 青空文庫

「ずんぐりむっくり」の首が連想される。日本語コーパスには「太短い」や「長細い」の用例は見られるが、「太長い」や「長太い」の語はほとんど見られないが、Web 上には数例の用例が存している。

7) 「今年こそ太長い恵方巻きを」(kokorononeko.blog)

8) 「長太いヒールのハンプスです。」(izumikutumise.blog)

これは、先行要素と後接形容詞で、意味として結びつきやすい場合と、あまり結びつかない場合とが考えられるのではないだろうか。「細さ」と「長さ」は意味上関連しやすく、「太さ」と「短さ」も関連しやすいということだ。しかしなかには特徴的な形状もあり、例7)のように、恵方巻きであればまずある程度の「太さ」と「長さ」を伴った形状が「太長い」で表現される。また、「長太い」では女性用の靴のヒールは「細い」く「小さい」形状であるのが一般的であるにもかかわらず、例8)は靴修理の広告で「太く」「長い」特殊な形状のヒールの修理の説明について、こうした表現が行われている。表現対象の形状に応じて、必要により造語された場合と考えられる。

その他の場合について見ると、「馬鹿長い」「下手長い*」「悪長い*」は、先行要素は、後接形容詞「長い」を強調している場合であることがわかる。次に用例を見ていく。

「馬鹿長い」

9) 「ふところから手の先だけを出し、馬鹿長い顎の先をつまみながら、のんびりと空を見上げている」(久生十蘭『顎十郎捕物帳 都鳥』) 青空文庫

ここでは「並はずれて長い」の意である。「～長い」による強調表現は3語であるが、そのうち2語は近代以降では用例が見られない。また「～短い」が強調される場合は、次の「ずずら短い」のみである。

「ずずら短い」

10) 「下女がふみずずらみじかくぐちを書く」(『雑排 川柳評万句合宝暦一三』)

この語の意味は、「寸詰まりに短い。ひどく短い。」(『日本国語大辞典』)であることがわかる。「ずずら」のみでは辞書に登録されていないが、近世で用いられた強調語と考えられる。「～短い」の強調語が多くは造語されなかったのは、意味的に需要がなかったためではないだろうか。

これらをもとに、他の場合についても、次の2つの観点で見ていく。まず、複合形容詞が強調の意味を持つのは、近代以前に多く見られる。「高、強、大」意味を持つ場合よりも「低、弱、小」意味を持つ場合の方が強調語は造語されにくい、という傾向を指摘することができる。

② 「広い」8例 - 「狭い」4例

「広い」

名詞+形容詞 手広い…幅広い 口広い* 事広い* 野広い* 場広い*
形容詞、副詞+形容詞…ぬる広い* 横広い*

「狭い」

名詞+形容詞 ▽手狭だ 所狭い 幅狭い 浮世狭い* (注5)

まず、先行要素が同一の場合についてどちらに用例が多く存するか、日本語コーパスでの延べ語数を見ると次のようになる。

「手広い」54件「手広だ」1件－「手狭だ」58件、「幅広い」1805件－「幅狭い」2件

「幅広い」－「幅狭い」では、「高、強、大」>「低、弱、小」の関係であるが、「手広」－「手狭」では出現件数がほぼ拮抗している。「手狭」には「空間的に狭い」という意味だけではなく、「ゆとりがない」という心理的ニュアンスが含まれる。そのためこの語は用法が広がり、使用頻度が上がっているのではないだろうか。

次にいくつか注目される点を挙げる。先行要素が名詞の場合について見ると、「口広い」「事広い」「野広い」「場広い」と近代以降には見られない語が多い。以下用例を見る。

「口広い」

11) 「口廣いことだが、わたしらが孫といつちやア、近所で名代のうちば者だから、何余所の子を泣かせやうズ」(『浮世風呂』63巻)

ここでは「偉そうなことを言うようだが」という意味である。「～広い」の意味は「空間・面積が大きい」という意味からは拡大している。ここでは「広いこと」に価値判断が加わり、「尊大である」といったマイナスの評価的意味が付加されている。

次に、修飾関係の場合について用例を見る。

「ぬる広い」

12) 「つねにあみの目のあらうて礼儀法度政道のぬるびろいふうわびなげいたれば」(『玉塵抄 五一』)

先行要素「ぬるい」には「速度が遅いさま。ゆるやかだ。のろい。まだるい」(『日本国語大辞典』)といった意味がある。用例12)は「だらしなくゆるい。ゆるみ広がっている」(『日本国語大辞典』)これは、現代語としてはあまり見られない意味である。また「～広い」の意味は、「空間や面積、間隔が大きい」という意味ではなく、価値判断が加わり、や

はり「広いこと」についてマイナスの評価的意味が付加されている。

近代以前にのみ用例が見られる語には、先行要素、後接形容詞に意味の伸縮が起り、何らかの価値判断が付加されていることが観察される。

③ 「高い」23例－「低い」0例

「高い」

名詞＋形容詞…あご高い うず高い 格式高い 勘定高い かん高い 計算高い 声高い 背高い そろばん高い 名高い ほこり高い 目高い 物見高い 居高い* 算用高い* 日高い* 人高い* 骨高い* 悪高い*

形容詞、副詞＋形容詞…馬鹿高い ひよろ高い うそ高い* による高い*

今回の調査では「～低い」の場合は、見られなかった。そもそも「～低い」で表現される場合があるのか今回見られた、「～高い」の先行要素に、ガ格を補い「～低い」の表現がWeb等に用例が存するか、テストを行った。その結果次の場合については「低い」で表現されていた。

「格式が（の）低い」「声が低い」「背が低い」「日が低い」では「低い」が用いられるが、他の語では「～低い」は使用されず、「～高い」に比べ使用される範囲が限定されていることになる。これは「低い」に比べ「高い」が使用範囲が広く、多義に使用されることを示している。

また、「高い」が多義であることを示すものとして、古語における「タカシ」について次のような記述がある。「形容動詞ヒキナリ、ヒキヤカナリなどのほか、形容詞ミジカシ、イヤシ、連語タダレリ、オクレタリの対義語として用いられた」（『日本国語大辞典』）とある。多様な語の対義語であることがわかり、「タカシ」が多義語であることを示している。形容詞「高い」は「低い」に比べ多くの意味を担う。そのことが、より多くの複合形容詞の造語を可能にしたのではないかと考えられる。

④ 「多い」5例－「少ない」3例

「多い」

名詞＋形容詞…おそれ多い 数多い おこと多い* 心多い* 残り多い*

「少ない」

名詞＋形容詞…残り少ない 頼み少ない* 頼り少ない*

「多い」－「少ない」の複合形容詞の用例は、いずれも近代以前に用例が存している場合の方が多く、現代では造語力が弱いことがわかる。ただ、「残り多い」は近代以降に用例が見られないが、「残り少ない」は、日本語コーパスでも延べ語数で108件存していて、「高、強、大」>「低、弱、小」という状況を示す他の語とは様相を異にしている。また、「～少ない」に関連して、「数少ない」は、『日本国語大辞典』には登録されていないが、日本語コーパスでは延べ495件存している。他の辞書で立項されているかを見ると、『大辞泉』（小学館）には「数少ない」は立項されており、「〔連語〕数が少ししかない。まれである。」とある。一般に、国語辞典には、例えば次のような語は立項されない傾向がある。

「知りたげ」「少年らしい」「歩きとおす」「走りきる」…

これらは、接辞の付いた場合に「意味記述がそれほど必要とされない場合」であるか、複合語であっても「語と語が結合した結果、特筆すべき新たな意味が生じない場合」などであると考えられる。

「数少ない」は、先行要素にも後接形容詞にも意味の伸縮が見られず、結合の結果新たな意味も生じていないため、国語辞典には立項されていないものと考えられる。

しかし「残り少ない」や「数少ない」で表現される「希少さ、まれさ」は「多く、ありふれているもの」より人の関心を集める価値判断を伴った意味内容である。消滅する手前であることは危機感を伴う意味を持つ。そのため使用頻度が高くなるのではないだろうか。このように、意味内

容が特に注目される場合については、「高、強、大」＜「低、弱、小」になる場合があるということである。

⑤ 「太い」18例－「細い」4例

「太い」

名詞＋形容詞…押し太い 底太い 胴太い 喉太い 筆太い 骨太い
気太い* 胆太い* 音(ね)太い* 野太い*

形容詞、副詞＋形容詞…厚太い 図太い いけ図太い* いけ太い*
けち太い* 死に太い* 馬鹿太い* ほて太い*

「細い」

名詞＋形容詞…心細い 骨細い 気細い*

形容詞、副詞＋形容詞…長細い

やはり「～太い」の方が「～細い」より異なり語数が多く見られる。またここでも「～細い」に強調語は見られないが、「～太い」には「図太い」「いけ図太い」「いけ太い」「けち太い」「死に太い」「馬鹿太い」「ほて太い」と強調語が多く現れることが注目される。そして、そのほとんどが近世以前に用例が見られる場合であり、こうした強調は近代以降より以前に盛んに行われていたものと考えられる。

また、先行要素が同一の「骨太い」－「骨細い」の場合で延べ語数を見る。この場合もやはり形容動詞形「骨太な」が36件、形容詞形「骨太い」は2件であるのに対し、「骨細い」は1件、「骨細な」1件とやはり、「高、強、大」＞程「低、弱、小」の関係が存している。次に用例を見ていく。

「骨細い」

13) 地階よりのほりきたれば、骨細きにんげんどもが溢れていたり (『増補版現代短歌全集 北方論』)

意味を見ると、「骨格がほっそりしているさま。骨が細くしなやかなさま。」(『日本国語大辞典』)とある。一般的には使用される語ではなく、文学的な表現として用いられる語ではないだろうか。

⑥ 「厚い」2例、「濃い」5例－「薄い」2例

「厚い」

名詞＋形容詞…手厚い

修飾関係…ぶ厚い

「濃い」

名詞＋形容詞…油濃い 色濃い 汗濃い* 寝濃い* 味噌濃い*

「薄い」

名詞＋形容詞…手薄い 肌薄い*

ここでも先行要素が同一の場合、「手厚い」－「手薄い」について延べ語数を見ていく。「手厚い」は延べ236件、「手薄」について形容動詞形「手薄だ」は86件、形容詞形「手薄い」は2件と形容動詞形の方が多く見られ、やはり「高、強、大」>「低、弱、小」という状況が確認できる。語例について見ていく。

「寝濃い」

14) 頻にをとづるるに寝濃い八千代さへ目覚て(『好色一代男』七.五)

用例14)の意味は、「寝坊である。一度眠ったらなかなか目を覚まさない」(『日本国語大辞典』)とある。「～濃い」は、「眠りが深い」という意味にまで拡張している。

⑦ 「強い」37－「弱い」7

「強い」

名詞＋形容詞…印象強い 自惚れ強い 押し強い 我慢強い 気強い

心強い 克己強い 根気強い 根強い 執念強い 勝負強い 辛抱強い
底強い 耐忍強い 力強い 忍耐強い 根強い 粘り強い 意地強い*
命強い* 面強い* 我強い* 義強い* 行儀強い* 行強い* 吟味強い*
くじ強い* 鞍強い* 立て引き強い* 手強い* 涙強い* 馬鹿
押し強い* 鬣屑強い* 虫強い* 料簡強い*
修飾関係…しんなり強い

「弱い」

名詞+形容詞…気弱い 心弱い 力弱い 病弱い 面弱い* くじ弱い*
手弱い*

この場合でもやはり「～強い」の方が、造語力が強いことがわかる。
また、ほとんどが名詞+形容詞の形であり、先行要素が後接形容詞を
強調している場合は見られない。これは「～強い」自体が強調であり、
さらに強調すれば重複した表現になってしまうためと考えられる。

以下、先行要素が同じ場合について、日本語コーパスでの延べ語数が
どのような状況か見ていく。

「心強い」313件－「心弱い」12件

「力強い」1071件－「力弱い」6件

「気強い」71件－「気弱だ」127件、「気弱い」6件

ここでは、他の場合は、程度「高、強、大」>程度「低、弱、小」で
あるが、「気強い」については「気強」<「気弱」の状況であることが
注目される。「気」について注目される尺度は「弱さ」であり、「精神的
な弱さ」の方が「強さ」よりも記述されやすいということではないだろ
うか。同様のこととして「心細い」は見られるが、「?心太い」(「?」
は語例がない場合に付す)は見られないことが挙げられる。

⑧ 「深い」102例－「浅い」3例

「深い」

名詞＋形容詞…哀愁深い 秋深い 味わい深い 哀深い 哀れみ深い
 意義深い 慈深い 印象深い 因縁深い 疑い深い うたぐり深い
 遠慮深い 奥深い 思い出深い 思遣り深い 懷疑深い 悔恨深い 価値
 深い 感慨深い 考え深い 感じ深い 感謝深い 木深い 驚異深い
 興味深い 興深い 興味深い 教養深い 霧深い 疑惑深い 草深い
 毛深い 謙讓深い 好奇深い 孝心深い 心深い 猜疑深い 慈愛深い
 思案深い 示唆深い 慈善深い 親しみ深い 湿深い 嫉妬深い 慈悲
 深い 邪推深い 執心深い 羞恥深い 執念深い 趣味深い 情趣深い
 思慮深い 皺深い 信心深い 砂深い 底深い 嗜み深い 知恵深い
 注意深い 忠義深い 慎み深い 罪深い 露深い 同情深い 泥深い
 情け深い 馴染み深い 匂い深い 人情深い 妬み深い 根深い はにか
 み深い 鬚深い 風情深い 埃深い 目深い 魅力深い 葎深い 迷
 信深い 恵み深い 物深い 焼餅深い 野心深い 山深い 由緒深い
 ゆかり深い 雪深い 用心深い 欲深い 夜深い 理解深い 料簡深い
 輪廻深い 垢深い* 至り深し* 色深し* 恨み深い* 戯れ深い* 邪
 知深い* 年深し* 愷気深い*

修飾関係…うそ深い*

「浅い」…心浅し* しし浅い* 手浅し*(注6)

「～深い」は、以上に見てきた場合より、造語力が強い。「～深い」の意味を見ると、「川が深い」のように垂直方向への意味としてだけ用いられているのではない。程度が「高、強、大」である様子を表現する際に、先行要素と後接形容詞の意味的関連はあまり意識されず、多様な用法があることがわかる。これは「～深い」の以下にその分類を挙げる。

・水平方向に関して 「奥深い」「山深い」等

- ・時間的に 「秋深い」「夜深い」等
- ・物事の程度 「哀愁深い」「味わい深い」等
- ・かかわりあう度合 「因縁深い」「嗜み深い」「親しみ深い」等
- ・対象への心の打ちこみ方 「哀れみ深い」「心深い」等
- ・密度の濃さ 「霧深い」「毛深い」等

「～深い」は以上のように、多義であるため先行要素の意味もあまり限定されない。そのことが、より自由に他の語と結び付き、造語力が強くなっていると考えられる。

「～浅い」を後接形容詞とする場合は近代以降の用例はほとんど見られないことがわかる。『日本語新辞典』(小学館)にも、「頭を下げる」「息を吸う」など深さが特に注目される言い方では「浅い」は対応しにくいとある。ただ、日本語コーパスには、次の「心浅い」が見られる。

「心浅い」

15) けれども軒端萩がどこまでも心浅く、それ以後、ほかの男を通わせながらも源氏に何か言われると(岩佐美代子『源氏物語 六講』)

これは現代語化された『源氏物語』に見られる例で、いわば古語を再現させたものであり例外として捉えられる。

また「しし浅い」は、「やせている」の意である。この場合「浅い」は、「薄い」の類義として用いられている。

次の「手浅し」はどのような意味だろうか、用例を見る。

「手浅い」

16) 最後の矢を手あさく射たらむも無念なりと思案し給ふ(『保元物語 下 為朝鬼が島に渡る事』)

用例16)は「力が弱い。力があまりはいらぬ」の意である。「～浅い」は「弱い」の意味で用いられている。

いずれも、「ある基準面から下までの距離が短い」という、「浅い」が

持つ第一義的な意味ではなく、現代語としては使用されない意味で造語されている。

以上から全体的な傾向として、対義形容詞である後接形容詞の持つ意味として、程度が「高、強、大」である場合の方が、「低、弱、小」である場合よりも、複合形容詞が構成されやすいという結果が得られる。

また、近代以降にも用例が見られやすい場合は、名詞+形容詞の構成で、これらの複合形容詞は意味を連想することが容易な場合に多いことも観察できる。

3 考察

この章では、以上の調査結果に見られた現象には、どのような理由が考えられるのか、次の二点に注目して考察していく。

- ・なぜ程度「高、強、大」>程度「低、弱、小」の関係になるのか。
- ・なぜ近代以降には用例が見られなくなる場合が多いのか。

3.1 「高、強、大」の方が、複合形容詞を構成しやすい理由

ここでは、「高、強、大」を意味する形容詞の方が複合形容詞を構成しやすいのはなぜか。以下その理由を考えていく。

元来、対義形容詞が存する場合、程度「強」の意味を表す方に、中立の意味を表す用法が見られる。例えば、テレビの音量を調節する場合、「音の大きさを調節する」というように「大きさ」とは言うが、「小ささ」とは言わない。また、川の水深を測る場合も「川の深さを測る」と言い「浅さを測る」とは言うことはない。つまり、中立的な使用法や尺度を表す時に使用する語は、程度が「高、強、大」の方であると考えられる。まずはそのことが、程度が「高、強、大」の形容詞をより使用することにつながるのではないのではないだろうか。中立的な意味を持つことは

尺度を表す際にも用いられ、一般化されやすく、そのことで使用頻度は高くなるということである(注7)。

また、例えば「面長い」は特徴ある顔として表現される。しかし「面短い」は語として存在していない。これは先行要素の「面」、つまり「顔つき」について注目される尺度は、「短い」ではなく「長い」であるということだ。物事の特徴として注目されるのは、一般には「高、強、大」の場合であり、そちらの方が記述されやすい。日本語コーパスにも「長い顔」は20件存するが、「短い顔」の例は見られない。

さらに、身長を例に説明すれば日本語コーパスで「背の高さ」を検索すると55件用例が存するが、「背の低さ」を検索しても用例は得られない。やはり一般的な尺度は「高、強、大」の側にあると考えられる。

しかし、注目される特徴が「高、強、大」ではなく、場合によっては程度が「低、弱、小」の方である場合もある。次の例は、某店のメニューに見られた場合である。

17) 「ウッドストックステーキ /200g 2080円 200gでこの安さ！」

物の価格について関心が集まるのは「どれだけ高い」のかではなく「どれだけ安い」のかにある場合が多い。したがって、この場合は「高さ」と表現されることはない。「高さ」と「安さ」の日本語コーパスでの出現状況は、「高さ」4962件に対して、「安さ」228件である。一般には、「高さ」は中立的な意味に用いられ、「安さ」は程度が「低、弱、小」を強調する意味で用いられている。しかしこの場合では、関心が注がれるのは、「安さ」にあり、それが言語として表現されるからだ。今回の調査で程度「低、弱、小」が注目される場合としては、「残り少ない」「心細い」「気弱い」などが挙げられる。

「残り少ない」については、「大方がなくなって残る部分が少ない」(『日本国語大辞典』)という意味で用例が見られる。この対義と考えられる「残

り多い」は、「残る部分が多い」という意味ではなく、「残り少ない」の対義としては存在しない。ただ古語としては、次のような用例が存している。

「残り多い」

18)「たまのをにせむ心ちもし侍らぬのこりおほくなんとて」(『源氏物語』横笛)

「心残りが多い。残念である」という場合が存するのみであり、「残り少ない」の対義語として存している訳ではない。

これは先行要素「残り」については、少なさの方に関心が注がれるからではないだろうか。

このことは「心細い」は見られても、「?心太い」が見られないことと、理由は同じなのではないだろうか。「心細い」は「頼りなく不安である。心配である」と言う意味である。

つまり先行要素との組み合わせで、注目される意味が「低、弱、小」にある場合が存し、その場合には語例が多く存するということである。

3. 2 1 複合形容詞が減少していくことの理由

近代以前に複合形容詞が消滅していく場合が見られるのだが、それはなぜだろうか、要因をいくつか考えていく。

一つは、意味や用法の変化でありもう一つは、語の交替である。意味変化とは、近代以前と以後で複合形容詞の構成要素に意味や用法に相違が生じ、複合形容詞の持っていた意味は忘れられ使用されなくなる。語の交替とは、別の新しい表現が生まれたため、古い語形は新しい語形に追いやられたということ。

〈用法の変化〉

構成要素が古語では持っていた意味が現代語には用いられない場合が考

えられる。

「所狭し」

19)「せばき縁に所せきひの御さうぞくの下襲ひきちらされたり」(『枕草子 一〇四』)

「所狭い」について現代語辞書の立項の仕方を見ると、「所狭しと」の副詞として取り上げている場合(『明鏡国語辞典』)や両形が併記されている場合(『大辞林』)がある。現代語では、「場所が狭い」ことを言う場合に「所狭い」の語はあまり使用されず、「狭い」単独での表現で事足りる。そのため「所狭い」の使用頻度は低い。日本語コーパスを検索しても「所狭い」の用例は見られない。

古語に存する「所狭し」は「場所が狭い」という意味の他に「気づまりである。ぎょうぎょうしい。面倒である」という心理的にも拡張した意味を持つ語であった。現代ではこうした心理的な意味が失われ、意味が縮小している。このことについて以下、詳しく見ていく。

まず、現代語では「ところ」と「場所」の意味・用法には相違が見られる。以下「ところ」に特徴的で「場所」には見られない、意味・用法をいくつか挙げる。意味・用例については『日本語新辞典』を参照する。

意味

- ・ある人のいる区域。また住んでいる区域。(用例 お所はどこですか。叔父の所を訪れる。)
- ・ある人の所属する組織や集団。(用例 今度の仕事はおれのところでやらせてくれ。)
- ・その物の近く。その物のそば。その付近。(用例 校門の所で待ち合わせる。)

用法

- ・「公園のところ」や「わからないところ」のように、「～(の)とこ

ろ」のように使用される場合

・「言わんとするところ」のように形式名詞的な場合

以上のように現代語では「ところ」は「場所」に比べ用法が多様であり、意味が拡張していることがわかる。古語の知識を持たずに、「ところせまし」の語形を見ると、「場所が狭い」と言う意味が連想される。しかし実際には「ところ」の意味・用法は拡大していて「ところ」の意味・用法と、「場所」の意味・用法に隔たりが存在している。そのため「場所が狭い」という意味としては「ところせまし」の語は用いられなくなったものと考えられる。

〈意味の拡張〉

「事広い」

20) 「これをかの延喜のころのうたと、よくとなへくらべ見るに、かれはことひろく、こゝろのみやびかにゆたけくして」(『歌意考 94巻』)

「ことひろい」の意味は「①大げさである。②交際が広い。顔がきく」(『日本国語大辞典』)である。この場合では「～広い」の意味には価値判断の意味が付加されている。これは先に見た用例11)「口広い」、12)「ぬる広い」などの場合も同様と考えられる。

〈意味の特殊化〉

これは近世に多く見られる用法であるが、複合形容詞化することで、意味が限定される場合や特殊化する場合が存する。

「浮世狭い」

21) 「これは又浮世狭いお前が、路銀を拵(こしら)へて京へ行って見さっしゃりませ」(歌舞伎『猿若万代厦』序幕)

この語は、「勘当されて、身の置き所がない」(『日本国語大辞典』)と

いう意味である。ここでは「浮世」はただの「世間」という意味ではなく、「勘当されてしまった苦しい生活圏」を意味し、「狭い」は「窮屈で暮らしにくい様子」を意味している。「世間が狭い」という意味であれば、複合前の各要素から意味の予測はできる。しかし、先行要素も後接形容詞も意味が変化し、特殊な意味を持っている。それは、時代やジャンルに限定的された用法であったものと考えられる。そのため、後の時代には語の意味が再現できず、用いられなくなるのではないだろうか。

この類例として考えられるのが、先に挙げた用例3)の「舌長い」などがあり、構成要素それぞれに意味の伸縮が起きている。複合語の各要素に、意味の伸縮が起きていれば、その意味の組み合わせはいわば臨時的であり、通時的には用いられないのではないだろうか。その結果、ある時期に限定されて使用される語になるのではないだろうか。

これに対して「心弱い」など古語から現代語まで継続して存する語には次のような特徴がある。「心弱し」は『源氏物語』にも用例が見られるが「意気地がない。気が弱い」(『日本国語大辞典』)という意味である。この場合は、先行要素、後接形容詞に意味の伸縮は起きていない。そのため、時間が経ても語の意味を連想しやすいことになる。これは時代を経て、継続して使用される要因なのではないだろうか。さらに言えば、意味が特殊化した場合には、時限的な制約があるということになるのではないだろうか。

3. 2. 2 近代以降に減少する理由

それでは、もう一つの課題として、このような結合が、なぜ近世語に多いのかについては、現段階では次のようなことが考えられる。

近世では新たな意味を持つ語が必要とされた場合に、新たな要素を用いて造語していく方法ではなく、すでにある要素を利用する方法である

と考えられる。これは既存の要素の意味を伸縮させて融合し、新たな意味を持たせる方法である。そのため、複合化する前に持っていた構成要素の意味は、時間を経てから再現することは難しくなる。つまり、語彙の増加のさせ方が現代語とは異なっているのではないかと考えられる(注8)。現代語で新たな意味の語が要求されたときには、このような意味の伸縮した語の融合による複合化という方法は選択されなかったのではないだろうか。意味拡張という方法は、以上に見たように時限的な制約も考えられる。そのため、近代以降は新要素を用いて新たな語彙を増加させる方法が採られたのではないだろうか。

〈語を強調する方法の変化〉

先行要素と後接形容詞が修飾関係の語の場合、先行要素が後接形容詞を強調する意味になる場合が見られる。この中には、現代語としては見られなくなった語が存している。例えば「悪長い」「うそ深い」「うそ高い」「馬鹿太い」などである。強調表現は、よりインパクトの大きい表現が求められるため、使い古されれば新たな表現へと変化が激しいという傾向がある(注9)。

現代語では強調語を造語する場合には、このように複数要素を複合して行う方法よりも、多様な副詞を用いて強調する方法や接頭辞を用いる方法が採られるようになり、複合語は用いられなくなる傾向があるのではないかと考えられる。

例えば接頭辞「超～」による強調は、「超長い」「超楽しい」「超弱い」のように、後接形容詞がどのような意味であるかを選ばず、言わばオールマイティーな造語が可能である。これに比べ、複合形容詞で強調をするのは、上接要素と後接形容詞の意味の組み合わせを考える必要があり、言わばコストの高い造語法と言えるのではないだろうか。

〈複合化による機能〉

現代語で語の複合という方法の造語が行われていないかと言えば必ずしもそうではない。それは複合動詞については現代でもなお盛んな造語が行われているものと考えられる。それでは、複合形容詞による造語の方法と、複合動詞による造語の方法にはどのような違いが存するのだろうか。

複合動詞による造語が持つ機能は複合形容詞に比べ、多様であると考えられる。複合形容詞の機能をまとめると

- ① 先行要素が後接形容詞を修飾する場合
- ② 先行要素について後接形容詞が補足・説明する場合
- ③ 先行要素と後接形容詞が並列関係の場合

に分けられる。これは、意味を限定したり特殊化したりする機能であり、限定的であると言える。

これに比べ複合動詞は修飾関係の意味以外にも、開始「歩き出す」「殴りかかる」等、継続「泣き暮らす」「降りしきる」等、完了「降り止む」「歌い上げる」等の表現でアスペクト的な意味を担う場合もあり、多機能であると言える。そのため複合動詞は派生語を造語しやすく、造語力が強いと考えられる。

複合形容詞は、複合動詞のように用法は多機能化には向かわなかった。そのため新たな造語力は持たず、副詞で意味を補う方法や接辞を用いる造語に取って代わる傾向があるのではないだろうか。

4 まとめ

対義形容詞を後接形容詞とする複合形容詞の考察から、以下のことが考えられる。

まず、対義形容詞が複合形容詞を構成する際、後接形容詞の意味が、

「高、強、大」になる意味を持つ方が、「低、弱、小」の意味を持つ場合よりも造語力が強い。この理由として、前者の方が一般的には中立的な意味を表すこと。また、特徴として表現されるのは「高、強、大」の意味の場合であることが挙げられる。

また、複合形容詞は近代以降に造語力を弱めていることが観察される。その理由として、複合形容詞の構成要素の意味を見ると、意味が拡張された場合か、限定された場合である語が多い。複合動詞の場合であれば、複合化することで、新語形は多機能になると考えられる。しかし、複合形容詞化することでは新語形は多機能になるとは言えない。そのため複合形容詞は複合動詞のように造語力を強めることはなかったものと考えられる。

さらに、特に語の意味を強調する場合について、近代以降は多様な副詞を用いたり、自由に接続可能である接辞を用いたりする方法が採られたりしたため、複合形容詞による造語は増加しなかったのではないかと考えられる。

- 注1 調査対象は『日本国語大辞典』の見出しに挙げられたる語とする。また、調査対象を複合形容詞とするので「か弱い」のような接頭辞+形容詞の場合は派生形容詞とし、今回は扱わない。
本文中の各語の意味記述については、特に表記しない限り『日本国語大辞典』から引用する。
- 注2 本稿では、「横広い」「横っぴろい」、「長細い」「ながっほそい」のように、異形態が存する語については、別々に表記しない。また、方言形としてのみ見られる場合についても調査対象としない。さらに、明治時代以前に用例が存し、現代語としては見られない語については、語末に*を付した。
- 注3 愛知県の東三河地方では「気長い」「気短い」などの形容詞形の使用が観察されることがある。
- 注4 「複合形容詞の研究－形容詞+形容詞の構成による場合－」（2014）漆谷広樹『日本語史の新視点と現代日本語』勉成出版 参照

- 注5 ▽印は形容動詞形しか見られない場合に付した。
- 注6 「夏浅し」「春浅し」「冬浅し」「夏深し」などの季語として見られる場合は、調査対象に含めない。
- 注7 プラス方向の意味を表す方の語に中立的な意味を表す用法があり、「背の
高さはどれくらいですか」「この池の深さを知っていますか」（『認知意味
論のしくみ』（2002） 町田健編 杉山洋介著 研究社）
- 注8 その理由として、いわゆる分析的傾向が見られる以前の造語法であることが
挙げられる。
- 注9 『日本語ウオッチング』（1998）井上史雄 岩波文庫 P92

資料

- 『日本国語大辞典』第2版（2000）小学館
『大辞泉』（1995）小学館
『日本語新辞典』（2005）小学館
『広辞苑』第六版（2008）岩波書店
現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）国立国語研究所
青空文庫 <http://www.aozora.gr.jp/>
複合動詞レキシコン 日本複合動詞辞典 国立国語研究所